

て、わずか5年間で58年には自然村落規模（2、3百人規模）を遥かに超えた1万人規模の人口を抱える人民公社の組織化にまで行き着く。この過程で農民民衆に求められたのはみずからが住まう「村落共同体」への忠誠ではなく、明らかに「国家」への忠誠だった。そして農民民衆は事実、毛沢東の国家からのこの忠誠要求に積極的に呼応したのである。

問題はなぜ元来「等身大」の「非政治世界」に生きる常民である中国の農民民衆が、かくも容易に「国家政治」に取り込まれたのかという点だ。竹内好は、この点に十分な考察を加えなかった。というより、中国の農民民衆がそのような変貌を遂げたことを信じたくなかったのかもしれない。そこに菅孝行が指摘するような竹内の毛沢東に対する「思い入れ」が働いていたことは否定できない。しかし留保して言えば、竹内の戦後日本近代に対する批判的意識こそが、現象的にはそれと正反対にも見えた新中国と毛沢東に対する過剰な期待を抱かせたという点も見落としてはならない。

では「等身大」の「非政治世界」に生きる常民が、「抵抗」の「政治」レベルを越えて、なぜ「国家」に対する抵抗ではなくて「国家」に加担する「政治世界」に「飛翔」してしまえたのか？

この点は次節で詳しく論じるように、竹内好が魯迅に寄せて再三にわたり強調し続けた「掙扎」（そうさつ。「抵抗のあがき」の意）あるいは「敗北に対する抵抗と同時に、敗北を忘れることに対する抵抗」さらにそれらを通じての「敗北の自覚に裏打ちされた抵抗の持続」という一連の問題に深く関係している<sup>26</sup>。

この「敗北の自覚に裏打ちされた抵抗の持続」（以下、「掙扎」と略）という論点は、われわれのシンポジウムで孫歌が、竹内好再考にもっとも不可欠な部分として強調した点だった。孫歌がこの点を強調したのは、新中国成立後、毛沢東時代はむろんのこと、さらに今日の改革開放の中国に至るまで、この「掙扎」の持つ重要度が増しこそす

れ、低減していないこと、にもかかわらず「掙扎」が忘れ去られているということ、そうした状況認識が孫歌にはあるためであると私は思っている<sup>27</sup>。

いずれにせよ、もし竹内がこの「抵抗の持続」をめぐる基本的な観点を、新中国成立後の毛沢東の中国にも当てはめて考えることができていたならば、おそらく毛沢東にあれほどの「思い入れ」はしなかったはずである。その病理を次に問題にしよう。

## [V]

### 「オリエンタリズム」と「内発的發展」： 敗北の自覚をめぐって

18世紀以後、今に至るいわゆる「近現代」の歴史において、常民の「等身大」の世界を破壊するものとして、またそれゆえに常民の「抵抗」と「抗戦」を呼び起こす破壊者として「向こうから押し寄せてきた政治世界」の本質は、そのほとんどが「欧米近代」の持つ「自己実現と自己拡張」から生まれる「軍事政治」の力だった。

中国革命において、農民民衆の日常の暮らしを破壊しにやって来たのも、日本を始めとした欧米列強の侵略と「半植民地支配」の圧力であり、つまりは「欧米近代」の「自己拡張」による軍事行動だった。さらに日本の不知火海に生きる常民である水俣漁民の日常の暮らしを、有機水銀を含む工場廃水を垂れ流すことによって破壊した新日本窒素水俣工場も、むろん「欧米近代化」の流れの中で登場した「日本近代」そのものの「自己拡張」が産み落としたものだった。同様のことは成田国際空港の建設のために、先祖伝来の農地を強制収用され、その常民の暮らしを破壊された成田三里塚農民にも言えたのである。三里塚農民にとって、生活の破壊者である空港公団は、やはり1960年代の高度成長をひた走る「日本戦後近代」の「自

己拡張」から生み出されたものだった。

通例「西欧の衝撃」(ウェスタン・インパクト)と呼ばれるもの、それは「欧米近代」の「自己拡張」あるいは「自己実現」によって「アジア」にもたらされたものだが、この「アジア」と「ヨーロッパ」の東西世界の出会いこそ「アジア」の「抵抗」「抗戦」を生んだのである。ところでこの世界史近代におけるウェスタン・インパクトの構図は、上に見たように、単に地域としての「アジア」にもたらされただけでなく、ヨーロッパ世界内部たとえば日本社会内部にも同時に生じたものだったのである。その意味では水俣病闘争や三里塚闘争は日本の「内なるアジア」の「抵抗」と「抗戦」であったと言える。

竹内好はウェスタン・インパクトによって「アジア」の近代は、迫られて幕を開けたと指摘するのだが。このような東西関係の構図を基にした歴史解釈や歴史認識は1970年代後半期以後、サイドやコーエンによって「オリエンタリズム」として批判された。だがサイド流の「オリエンタリズム」批判は、竹内好に対する批判として適合するだろうか？ 議論を先取りして言えば、竹内の論点には明らかに「オリエンタリズム」批判を含んでさらにそれを越える内容がすでに用意されていたのである。

さて我々のシンポジウムにおいても溝口雄三が、この「オリエンタリズム」批判の問題を意識して、竹内批判を含む形で問題を提起し、新たな歴史解釈を行った。

溝口の論点を要約すれば、以下ようになる。

「オリエンタリズム」の構図とは、世界史の同時代における東洋と西洋の出会いという、いわば空間軸(これを溝口は横系と呼ぶ)における西方からの「近代化」圧力にほかならない。この横系の圧力は東方すなわち「東方アジア」にとっては迫られたものであって、それゆえそこには「東方アジア」の「受動的」姿勢が抜きがたく生じる。そしてまたこの「受動性」こそが「東方アジア」

の歴史的「主体性」を見失わせ、みずからが「西欧中心主義」の「オリエンタリズム」に陥る要因ともなってきた。

ところで「東方アジア」における「近代化」は、何もこうした東西関係による横系の力だけで形成されてきたわけではないと溝口は指摘する。すなわち「東方アジア」それ自体の内部の時間軸(これを溝口は縦系と呼ぶ)における「近代化」に向けた内発的力こそがより重視されねばならないとする。具体的に溝口は1911年の「辛亥革命」の事例を取り上げ、革命を支えた中国各省・各地の「新軍」は、単なる軍事的組織だったのではなく、少なくとも省単位以下の地域村落社会の内発的「近代化」に支えられたものだったと結論付けた。つまり「新軍」による「革命」は、同時に地域に発する内発的な「社会革命」でもあったとするのである。

問題はしかし、その内発的「近代化」が果たして常民の「等身大」の世界を基盤とした、その意味で生命循環の時間的周期の制約を受ける動植物を対象とした農林漁業(第1次産業)を切り捨てることのない「近代化」なのか、というところにある。つまり「近代化」がいかに内発的なものであっても、その内容が「欧米近代化」モデルを目標とする可能性も依然あるからだ。溝口はこの点に関しては、縦系の内発性が強く現れれば、かりにその内容が「欧米」モデルに近い方向をたどったにせよ、「オリエンタリズム」の受動性は克服されると楽観しているように思われる。

以上の分析に立って、溝口は横系と縦系の二つの座標軸のうち、より縦系を重視する立場から歴史をとらえる視座を獲得することの必要性を訴える。

溝口はここでは「東方アジア」の内発的「近代化」の側面を、国家レベルからではなく地域レベルに視点を置いて強調しているのだが、その論点は1970年代に鶴見和子と市井三郎らが組織した「思想の冒険グループ」が提起し、のちに鶴見和

子自身や玉野井芳郎、川田侃らによって「内発的発展モデル」あるいは「地域主義」と呼ばれるようになった論点とほぼ同じものと言ってよい<sup>28</sup>。問題はそうした縦軸の「内発的近代化」が横軸から押し寄せる「外発的な欧米近代化」の圧力を凌いで、「東方アジア」の「内発的近代化」に成功し得るのかという点にある。つまり溝口風に言えば、縦糸が横糸を凌駕し、「オリエンタリズム」の圧力に勝利することができるのか、ということである。

竹内も決して「東方アジア」に内発的な「近代化」への試みがあったことを否定してはいない。竹内と溝口の違いは、竹内が縦糸としての「東方アジア」の内発的近代化は常に横糸の外発的な「欧米近代化」圧力に対する「抵抗」として展開されるほかに、しかもその「抵抗」は溝口が主張するように勝利を勝ち取ることができるのではなく、むしろ現実には常に「敗北」を余儀なくされると見なしている点にあった。

ここで竹内が「敗北」を強いられると言うのは、決して軍事政治的な意味あいでは言っていない。軍事政治的にはあとに見るように、一時的には「東方アジア」の「内発発展モデル」が「勝利」を得ることもあるのである。「敗北」とは「社会発展モデル」として、次第に「欧米近代モデル」に侵食され凌駕されていくということ、またそれと同時に、心理的にも「欧米中心主義」としての「オリエンタリズム」に侵されてゆくという意味である<sup>29</sup>。ただし、当然ながらどんな「社会発展モデル」も、「欧米近代モデル」も含めて、歴史の発展過程の中で静態的なものではあり得ず、不断に変化を遂げる。しかしここでは、歴史発展過程の変化が依然「欧米近代」の「自己実現、自己拡張、自己保存」として展開されるために、「東方アジア」はなお欧米の主導的影響力の下に置かれ、「オリエンタリズム」の心理的圧力下に置かれ続けるということ、それが竹内の言う「敗北」である。

これに比べて、溝口は「東方アジア」の縦糸に発する内発的「近代化」の展開が、横糸から迫る「オリエンタリズム」の外発的な「近代化」の展開に対する「抵抗」としてではなく、むしろ外発的圧力を意識することなく、それ独自の形式で立ち上がってくるという点を強調する。そこにこそ内発的発展が外発的な「オリエンタリズム」に呪縛されない「主体性」をもって成功し得る理由があると見るのである。では実際にそのような「主体性」を持って「オリエンタリズム」の呪縛を解く縦糸の「内発的発展」は可能なのか？

この点を検証するために、再び新中国成立後の毛沢東時代の中国に視点を移して見よう。

---

## [VI]

### 時間のディレンマ

1958年に毛沢東の呼びかけによって開始された人民公社、大躍進、総路線の、いわゆる「三面紅旗」政策では、第一には、農業技術的にはトラクター、コンバインなどの現代機器に頼るのではなく、トラクターの代わりに「双輪双華犁」を代表とした中国伝統の農機具を改造した新型の大型農機具を用いることが強調された。この政策は「洋法」（西洋的技術の意）に依存せず、「土法」（中国土着の技法の意）を軸とした「洋土結合」の方法と呼ばれた。さらに第二に単に国家規模のレベルのみならず、郷のレベルに当たる人民公社においても「自力更生」（自力に頼って生活生産を発展させるという意）によって飛躍的發展を目指すことが強調された。つまりそれまで中央政府から地方に与えられていた財政補助金を大幅に減らし、かわりに地方政府が中央政府に毎年納めていた上納金を大幅に減じて、あらたに地方政府としての人民公社に財政自主権を与えたのである。これはそれまで中国が踏襲して来たソ連型社会主義の中央集権モデルを、財政面で地方分権的モデル